

宮武 正登 提出 学位申請論文

『肥前名護屋城の総合的研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

文禄・慶長の役において大陸派兵の港湾基地となり、豊臣秀吉の御座所となつた肥前名護屋には、豊臣政権直営の城郭と豊臣家臣団の武家屋敷地区が建設されるとともに、周辺には全国各地から参集した百を超える大名の陣所が営まれた。これらの諸要素に加え、港湾や街道に立ち並ぶ町屋の賑わいは、同時代の製作と推定される『名護屋城図屏風』にうかがうことができる。こうした「都市」的繁栄も、秀吉の死と慶長の役の日本軍撤退により終結を迎え、城郭は破城となり、名護屋はもとの農漁村に戻ったが、後世の改変を受けることが少なかったため、往時の遺構がよく残存しており、昭和六十一年以来、佐賀県による発掘調査が重ねられ、多くの興味深い知見が得られている。

名護屋城は、数ある豊臣政権直営城郭の中でも唯一ほぼ完形を保った稀有の事例として、織豊系城郭の変遷を語るうえで不可欠の存在でありながら、先行研究は十分とはいえない状況であった。長くこの地の調査に深くかかわってきた宮武正登氏によるこの学位申請論文は、名護屋城のみならず、周辺に構築された陣所や町場などを含め、文禄・慶長期における名護屋の地の全容に関する初めての本格的な研究であり、広く史学・地理学・考古学など関連諸分野の研究資料の丹念な分析と総合により、城郭や陣所の具体相の解明を通じて、都市史における名護屋の位置づけを試みた意欲的な研究である。

本論文は四章からなり、序章と結章が付されている。まず、序章「研究の視点と目的」では近年における織豊系城郭研究の成果を概観し、肥前名護屋城の事例研究の意義を強調する。

第一章「名護屋城の成立とその構造」では、まず文献史料を用いて、名護屋城の築城経過が整理される。突貫工事によっていったん完成を見た名護屋城であったが、天正二十年四月末の豊臣秀吉入城以後も、継続していくつかの追加

工事が実施されたことに注目する。次いで、名護屋城の構造の特質を、構成する個々の曲輪の形態や機能、相互の接続状況などから考察し、石垣山城と共通する当該時期の豊臣系城郭の縄張の特徴を明らかにするとともに、大坂城と同様、遊興空間として山里丸が整備されていたことなどから、名護屋城の大本営的役割を強調する。さらに虎口の配置の分析から、城郭への進入路として大手口ではなく搦手口が正面にふさわしく、この導線上に示威的性格の強い意匠が集中していたことを明らかにした。また大手口・搦手口ともに城郭の南に開かれ、北側の町に接続されていない点も重要な特徴であると指摘する。

第二章「名護屋城下町の特徴と都市史上の意義」では、まず名護屋「城下町」の賑わいの実態を史料に依拠して叙述したのち、著名な『名護屋城図屏風』や各大名「配陣図」など、往時の名護屋の景観を伝える絵画・絵図史料や明治期地籍図などの地図資料を駆使して、「城下町」の構成要素や配置を確認し、その特徴や空間構造上の特異性の抽出を試みている。町は、城郭から鯉鉾池を挟んで南側の中心街路沿道に位置する武家屋敷地区と、そこから港へ続く三筋の街

道に沿う中心的町場地区、さらにその周辺の大名陣所近在に分布する散在的町場地区から成る。これらの町場には惣構の囲郭もなく、武家屋敷地区の一部を除き、町割が施された痕跡もないが、町名伝承から同業者町の形成が推定でき、これらの商人職人町が政権側の要請に応じて創出されたというよりも、戦場景気につられて自然発生的に成立したものと解釈する。すなわち一見、城郭・武家屋敷・町場が階層的に配置されているようにみえるが、各要素は相互に独立して成立し、全体を統括する計画は存在しなかったものの、のちの後追い工事によって、町場から城郭へ通じる経路が建設された可能性を指摘し、その契機として文禄二年五月の明国講和団の来日・初折衝を挙げる。こうした二次的整備も続行するなかで、名護屋は突然その役割を終えた。著者は都市名護屋の本質を「擬似城下町」と評し、軍事拠点としての機能が都市機能の一元化（城下町としての成熟）を阻んでいたと結論づける。

次いで第三章「大名陣所の実態と系譜」では、臨時設営を前提とする「城」と「陣」とが未分化であった中世前期から、両者が機能分化をとげる南北朝時代を経て、

戦闘の長期化に伴い普請作事が充実する戦国時代の陣への変遷をたどり、織豊期の攻囲戦における陣所の居住性の高さを指摘する。次いで発掘調査などにより解明が進んだ名護屋の大名陣所の実態を分析し、中世的な山城曲輪群による構造が基本であったことを、多数の遺構図を掲げて確認する。ただしその設営は陣の規模によって多様であり、最高峰にランクされる豊臣秀保陣の城郭に準じる周到な設営は目をひくが、その他の少なからぬ陣においても遊興施設、とりわけ茶室設営は標準仕様であったらしいことを著者は強調する。

続く第四章は「豊臣系城郭の普請技術と名護屋城」と題し、石垣構築技術の観点から名護屋城を位置付ける試みである。まず、中世における石垣構築の諸事例を概観し、石垣構築の技術革新の画期が安土城にあり、「勾配角度の設定と調整」こそがその新技術の根幹であったこと、さらに豊臣秀吉の城郭では、隅角部に加工石材を転用することにより、シャープなエッジ・ラインを実現したことが指摘される。さらに、安土、大坂、聚楽第、石垣山、名護屋と続く織豊系城郭の系譜の中で、名護屋で最初に出現した石垣の三要素を抽出し、段階的

発展のプロセスを再構成するとともに、その三要素のいずれもが石の断面を表面に並べて積み上げる、名護屋城特有の石垣技法と深く関連していることを明らかにした。構造的に有利とはいえないこの技法は、主として『名護屋城図屏風』のアングルで見える石垣列に導入されており、著者は石垣の美観を通じて誇示される権力の表象としての側面を強調し、名護屋城の「築城理念」が「視覚効果に対する強い価値観を投影した」ものであったと結論付ける。名護屋や倭城で豊臣系城郭の築城技術を学んだ諸大名は、帰国後自らの拠点城郭にステイタス・シンボルのごとく、それらの新技術を取り入れてゆく。他方、中央政権側では、武装解除に伴い、地方拠点城郭に豊臣系城郭の技術を導入して修復することにより、それらを「公儀の城」に代えてゆく効果があったと論じている。

以上の本論を踏まえ、結章では、名護屋城を含めて織豊系城郭が近世城郭の雛形となったとみなしうる八つのメルクマールを提示し、併せて今後の課題に言及している。

## 論文審査の結果の要旨

中近世移行期の城郭に関する研究は近年大きく進展し、「織豊系城郭論」として体系化が進められている。こうした研究動向のなかで、重要不可欠の事例となるべき肥前名護屋城であるが、長期にわたる調査の成果を総括する試みはいまだ十分ではなかった。こうした研究の渴を癒すべく、これらの調査に深くかかわってきた宮武正登氏によってこの学位請求論文が執筆されたのは誠に時宜を得たことであった。

多様な史資料群を用いた学際研究は、歴史分野においても稀ではない。しかしこの論文において宮武氏は、文字史料では原文書を読み解き、考古学調査では自ら発掘を行って遺構や遺物を図化し、発掘が及んでいない城や陣については

は、地表面から城郭遺構を観察する縄張調査を実施し、「城下町」空間の復元では近世絵図や明治期の地籍図を資料化するなど、すべての分野にわたって一次史資料にあたって研究を進めた。これは、この論文の研究方法の特質であり、宮武氏の独創性と、卓越した学識とを証明するものといえる。

研究の達成点として特筆すべきは、戦国期からの城郭変遷史を列島規模の視点で体系的かつ実証的に解明し、その上で安土城、大坂城と並び名護屋城が、わが国の近世城郭成立の画期となったことを明らかにした点である。従来、名護屋城は文禄・慶長の役のための特異な城と認識されてきたが、宮武氏による詳細な内部構造の分析と象徴性の把握によって、それが天守や御殿、苑池や草庵茶室を備えた天下人の居城としての機能をもち、近世城郭の指標となるべき存在であったことが実証的に解明された。

また名護屋城下について、大坂などと比較しつつ、都市史的な特質と位置付けを明快に論じた点も高く評価される。地形などの影響により明確な構造を把握し難かった名護屋城下だが、城郭・武家屋敷地区・中心的町場地区から成る



中核部に加えて、周辺の丘陵頂部に分立する陣と小規模町場による副次的な都市核を多数内包した構造と捉えた研究ははじめてであろう。こうした理解に基づき、宮武氏は名護屋の一次的陣所が恒久的な武家屋敷に変容することにより、近世城下町の構造が完成するという、「陣から近世城下町への変容コース」を示した。きわめて独創的な指摘と評価できる。

大名の陣についても、発掘調査や地表調査の成果を集約した多数の縄張図を用いて実証的な分析・評価を行った。臨時施設であったためその実態は詳らかでなかった陣の空間構成、身分による区画や施設の差異、軍事機能の実像などが、この論文を通じて明確となり、今後の陣研究の基準を提示したことの意味は大きい。とりわけ、文字史料にみえる「屋形作」、「町屋作」という表現に当時の陣における居住施設の差異を読み取ったのは興味深い。

城郭石垣の変遷とそれを実現した技術体系について詳細に論じた第四章は、この論文の白眉であろう。近年、城郭石垣の編年研究は長足の進歩を遂げているが、城郭の空間構成研究と石垣技術の研究が大きく分離して、両者を総合的

に理解する視点に欠ける問題があった。宮武氏の研究は、そうした研究上の課題を克服するもので、名護屋城をはじめとして詳細な城郭の空間構成を検討し、それを踏まえて城郭石垣の技術変遷の検討を進めた。ここに提示された中近世移行期における全国的な城郭石垣の変遷は、各地の最新の石垣調査の成果を網羅し、石割り方法と矢穴、石垣の隅角部の積み方、石垣勾配などを総合的に把握した、新たな理解の枠組みを確立するもので、高く評価される。とりわけ、名護屋城の石垣について、単純に野面積み、布積みといった指標を問題にするのではなく、割石積み石垣の出現に着目した。石垣の耐久性には不利だが、鏡のような美しい表面を演出する割石積みの出現に、石垣を権力表象の装置として用いた意図を読もうとするこの論文の視角は、石垣から政治と社会を論じるこれからの城郭研究の可能性を指し示すものである。

以上、特筆すべき点について述べてきたが、もちろんこの論文にも今後の再考を促したい点が認められる

まず、「城下町」という用語をめぐる問題がある。重要な先行研究（松本豊

寿氏など)においても、名護屋の城下がのちの近世「城下町」の先駆形態と評価できるかどうかが問題とされ、宮武氏自身この論文において名護屋を「疑似城下町」、「模擬的城下町」と評するからには、「城下町」ないし「近世城下町」の明確な概念規定を行う必要があった。しかし、この論文では「城下町」の語を無批判に用いており、このため、先行研究との事実認識や評価の違いが今一つ明確にならなかったのが惜しまれる。

一般に、研究対象への関わりや「愛着」が強くなるほど、過大評価に陥るリスクが高まるのかもしれない。この論文においても、宮武氏は城郭建設や城下の追加工事や二次的整備にあたり、当初方針からの変更があったことを強調し、その背景のひとつとして、名護屋に一時的な「首都」機能が付与されたことを指摘しているが、こうした「首都性」の所在についてはさらに広い観点からの再考が必要だろう。むしろ、この地に豊臣秀保が大規模な陣を張ったことをいかに評価するのか、という問題に対して、秀吉の「三国国割」構想との関わりを考慮に入れて考察することが期待される。

城郭石垣の技術的変遷の理解のなかでは、石垣隅角部の算木積みに対する「重ね積み」（「重箱積み」）の位置づけについて、これを算木積みへの過渡的な技術としてとらえるだけでよいか、再考を求めたい。加藤清正による熊本城大天守台石垣のように、慶長期に隅角部を重ね積みにして高石垣を実現した事例が認められる以上、隅角部の重ね積みと算木積みが並立した状況を想定して位置づけるのが、評価として穏当ではないかと思われる。

宮武氏は、これまで大韓民国に遺存する倭城を訪ねて綿密な調査を行うとともに、大韓民国の研究者とともに発掘調査や測量調査にもとづいた国際的な研究を深めてきた。あえてこの論文では言及を避けたのかもしれないが、やはり東アジアの視点から名護屋城の歴史的意义を問うことも重要であった。すでに文献史学の分野では文禄・慶長の役について、両国の史料を用いて論じたすぐれた研究がある。しかし城郭研究の分野では個々の調査成果は多くとも、歴史研究として体系的に論じたものは、いまだ見当たらない。倭城や朝鮮半島の城との比較研究から、名護屋城を捉える研究は、宮武氏の今後の課題として、そ

の成果に期待しよう。

以上、問題点や課題を列挙したが、これらは宮武氏の研究の価値を聊かも損ねるものではない。この論文は、戦国末期から近世初頭にかけての城郭の変遷のなかに名護屋城を位置づけ、その後の日本列島の近世城郭の成立に与えた影響を実証的に描き出すことに成功した。名護屋城に限らず現在の城郭研究を俯瞰し、その成果を集大成したこの論文が学界に裨益するところは極めて大であると認められる。よってこの論文の著者、宮武正登氏は博士（歴史学）を授与されるに十分な資格をもつものと認める。

平成三十一年二月九日

主查	國學院大學教授	吉田敏弘	印
副查	國學院大學教授	矢部健太郎	印
副查	國學院大學大学院客員教授	千々和到	印
副查	奈良大學教授	千田嘉博	印

宮武 正登 学力確認の結果の要旨

左記四名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、本大学院の博士課程において所定の単位を修得した者と同等以上の学力を有することを確認した。

平成三十一年二月九日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	吉田敏弘	印
副査	國學院大學教授	矢部健太郎	印
副査	國學院大學大学院客員教授	千々和到	印
副査	奈良大学教授	千田嘉博	印